



◎ 交 の じ かん  
~リンカンガクシュウ~



真剣に見ているモニター画面にはある掲示板が表示されている。

これは援交目的の出会い系でも

さらに深い場所にある、いわゆる裏掲示板だ。

つまり、それだけ特殊な相手を探す場所という事だ。

なにしろ自分の童貞を卒業する相手を

探そうとしているのだから真剣にもなる。

この掲示板は実際に体験した人達による

口コミが書き込まれているので失敗が少ないらしい。

複数の経験者によって

それぞれの女の子の容姿や性格、プレイ内容の感想などが書き込まれているので口コミ評価の信頼度は高い。



そのくらい理由でロロリンを参考にしよう

女の子をチェックしよう。

女の子達は個人でやっている娘もいれば

何人かでグループを組んでいる娘達もいるみたいだ。

そんな中で二つのグループに目が留まる。

『この娘達、評価高いな...』

気になった二人組のメンバーを覗いてみる。

最初の一人はミミちゃん。

ロリ巨乳の眼鏡っ娘。

おとなしそうに見える肉食系。

母性本能が強く、優し〜〜〜。

ゴム有り。パイスイなど巨乳をいかけたレイが得意。

ロロリンでも

『ロリ巨乳サイロー!』

『パイスイやばい!オレのキンレ埋もれて見えなかったW』

『セックス初めての僕でも最高の童貞卒業できました』

『騎乗位でゆれるおっぱいすげー!』

『授乳(母乳は出ないけど)手ロキとかげっ...』

とか思っていた時期が俺にもありましたW』

なぜ評価は上々だ。



「二ノ目はリンちゃん。」

「リンちゃんより小柄でスキタハロではなから膨らみかけの胸。」

「大きなツインテールが似合ってる。」

「ゴム有り。小さな身体からは想像もつかない程のヒタクハツギン。ロロクハロ」

「小さな身体からは想像も出来ないほどヒロインです！」

「ロロビッチW」

「金玉空になるまで搾り取られたW」

「スペシャルコースとか無理すぎW半分も持たなかったWW」

「俺のアナル処女を捧げました！」

「積極的すぎて犯されているみたいでゾクゾクしたW」

「なぞなぞい評価ばかりだ。」

「なぞなぞオリジナルのレース設定があるみたいだ。」



三人目はクロちゃん。

三人の中で一番小柄のつるつるたポニー。

クロちゃんはリンちゃんと一緒に駄目な子。

ゴム有り。本番なし。リンちゃんとの百合プレイ歓迎！

ロリは

「ふう…クロちゃん言葉責めありがとうございますー！」

「ロリレスブレイとかやばいワリンちゃんに犯されるクロちゃん

「二人の絡みを観ながらオナニーとかサイコーに抜ける！」

「クロ様！もっと踏んでくださいー！」

「俺のチンポ、クロちゃんに弄ばれて尻に皮伸びちゃったよw  
なんかいろいろ突っ込みたくなるよな  
評価が多いな…。」

他の女の子達にも一通り目を通してみたいぜ

やっぱいろいろの三人の中から選ぼうと思案する。

「おめかして娘のつるつる」

意を決して連絡を取ることにする。



その後、無事に連絡が取れて

待ち合わせの場所やフレイ内容などを

軽く打ち合わせた。

「うっ、うっ、なんだよな……」

待ち合わせの場所に着いたので

辺りを見回してみよう。



「おえ、ちょっとどうして？」

落ち着きなくキョロキョロしてたら

いきなり後ろから声を掛けられた。



「連絡くれたの、おじさんでいいんだよね？」

目の前の少女がこちらを見上げながら  
問いかけている。

「えっ…それじゃあ君が…」





「さーん・あーん」

自己紹介するの。

じつは反対から来たのが





「よ、よくわかったね?」

「じいじはそれなりに人がいるので」

「迷いつとなく声をかけてきた気がする。」

「あはっ、そりゃわかるわよ。」

「おじさん自覚がないみたいだけど」

「落ち着きなく凄くきょとんでたわよ」





股間のふんわりみみを褒めて撫でてくれる。

周りに見えないように身体を密着して

「うおっー！」

「バレバレじゃー！」

「こんなにリズメント張ってたら

「それにっ…」





「そんな状態じゃまともには歩けないんじゃない？  
」って一回抜いちやう？」

「びりびり取り出したのが  
ペンダーンを唾を吐いて公衆トイレの  
視線に移している。」





魅力的な提案に思わず固唾を呑むが  
理性を総動員して思いとどまる。

「いや、ホテルまで我慢するよ」

「にひっ、それじゃおじさんのが暴発する前に  
いきましょー!」

「いやいやと状況を楽しむように笑いながら」

大きな荷物を担ぎ直してホテルへと歩き出す。





「結構重いけど何が入ってるの？」

結構ずっしりとした感触だ。

「ありがとう！それじゃお願いね」

「ずいぶん荷物が多いんだね？  
重そうだし持つよ」





「ああ、それね、フレイ用小道具セットよ！」

コンドームにローションでじょ、オナホにローター、  
バイブにペニバン、エネマグラとか他にもいろいろ。

あとはコスプレ用の衣装とかね！

変わった趣味の人が結構いるから色々を用意してるの」

…職質とか受けけない様にホテルに急いでっ。





案内されてラフホテルに入る。

「到着〜！まずはルールの確認ね、基本ゴム着フレイ。

これは全コース共通。

おじさんの指定したスペシャルコースは

制限時間2時間、コンドーム十個セット。

射精できなくなったら

ゴムが残っていてもその時点で終了。

その代わり全部使い切った後は

生で中出しし放題！」







はっきり言ってかなりの出費だ。

「こっただけ出せば高級ソープにだって余裕で行ける。

『…ねえ、本当にいいの？』

おじさん童貞だっって言ってたじゃん。

途中でコース変更できないし、

童貞のおじさんについてのコースは

ちょっと厳しーって思ってるっ。

このコースは半ばで終わっちゃうから

かなりの損をうけるから事前にちゃんと

おじさん童貞のコースにしよう。



「ああ、大丈夫、

そういうかこのコースじゃないぞ

すぐに終わっちゃうぞうだったから」

こんな無謀な選択したのは

中途半端なコースを選択したら、

童貞卒業の前に終わってしまう

可能性が高いと思っただい、

生フレイが可能になるといっ

このコースの特典があったからだ。

「まあ納得してるならいいんだけど…」







なにが言いたそうだったか納得したぞ。

「それじゃ、ちょっと準備するから待っててね。

あっ、スク水のオフショーン代は

無謀なおじさんの勇気に免じて

サービスにしてあげるー！」





「じゃーん、どうかな?」

旧型のスクール水着に着替え、

見せびらかすようにクルリと回転する。

「おおお!」

彼女の小さな身体に似合いますぎるような  
似合っていて思わず声が出る。

「あはっ!喜んでもらえたみたいね。

それじゃあ始めましょー!」

みるみるうちに服を脱がされてしまった。

あっという間に服を脱がされてしまった。



『おじさん…』

こんなに立派な千斤ポ持っているのに  
童貞なんてもったいないよ』

ト着越のひもひにい勢超のソルトヘアを舞うてはる。  
。おへんておはるおはるおはる。





「それじゃ早速…えいっ！」

楽にぞうじに。パンツを奪われ下半身が露になる。

「…んっ?」

ズ  
ム  
ム

露出した。パンツを凝視して固まる。





「おじさん……」

こんなに大きいのには驚きなんです

皮オナチもきびくも……」

ぐわんぐわん

んきん

あおきさんさうじつあま  
事案なのはいちばんは驚きなんです。





キキキ

ニッ

フニ

「まっ、私は嫌いじゃないけどね。  
仮性包茎って弄ると面白いし。」



「あはっ、伸びる伸びるー！」



ムムムムと余った包皮を笑顔で弄ぶ。



「…んっ！」

もう、おじさん…ちゃんと皮剥いて洗っ…  
ずいーヒロい匂いがするわよ」

剥いた皮の中の匂いを  
スンスンと鼻くわすわ。





『こんな千んカヌまみれの包装千んポで

筆下ろしする気だったの?』



『まったく、しょうがないわね…』

『私が掃除して剥いてあげる』



「あ〜んっ…」

ぞうり言っついで皮の中に舌を滑り込ませたり  
チンカスを舐めたりしてんわ。  
いつもは包皮に隠れている部分が刺激される。





「んあっ」

唇をすぼめ包皮を捲る様に  
ピンスを啜えていく。

暖かな口内に包まれ

亀頭に舌が這い回る。

包皮を捲り

亀頭全体を啜え込みつつやる。





いきなりの刺激に耐えられないのはもうもなく  
意思とは関係なく暴発してしまう。

「ちょっ…まっ…射精るー！」

「んっ…おどろかすっ…」

「んっ」

「グッ」

「んっ」

あの淫癖や反吐を吐くエロい  
人たちの状態を理解したのなら  
嬉しい。キスを強ねてね。







「ん、んっー!」

ピニスを唾えたまま、

ちよっさ恨みがまごころで

じぢぢを見上げてくる。

口の中に吐き出された精液を

コクコクと飲み込み、

射精時に受け止めきれず

皮の中に溜まった精液も

綺麗に舐めあげていく。

ニャんっ

ニャんっ



『おじさん…いきなり射精とかひどくない？！』

怒ったおんながまたおんなを感じて非難する。おんな。

ちゅぽんぽん  
ぽんぽん

『おんなが気持ちよすぎて我慢できなかつたおんな』



「まったく、皮オナばかりしているからよ。  
まあ、目的は達成できた」



綺麗に舐めとられた亀頭むき出しのピンスを  
満更にいっしょに見ている。



『大人キンポの大人キンポの』



このスキルを使っている  
プレイに思いを馳せたいところだ  
かなあつたところだ。



『これ以上無駄撃ちしないように  
ゴムつけちやうおね』

はぜ、

鼻歌交じりにロゼドームの袋を取り出す。  
十枚のロゼドームを使い切らない限り  
このスペースジャムレースを頼んだ意味がなくなってしまう。



手馴れた感じで袋を開けると  
「イベント」を取り出してさながら  
何かを考え込んでくる。



「おじさんが喜びそうな  
ちょっと変わった方法で着けてあげる」



お尻指の尻指の尻指の先端を咥えていよ。

「そっ...?」

「ロンドームを咥えたまま

ペニスの先端にキスをする。

お尻指のまま一気に根本まで

ペニスを飲み込んでいよ。

ちゅ

「うおっ...」

「瞬の出来事だがペニスが

暖かな口内に包まれる刺激が気持ちいい。

ニクニク



「ぷはあっー!!」



根本まで怪んでいた頭を引き抜くや  
むじりおロケムフォームを  
装着された。ペニスが露になる。



「ふう…」



「やっぱりおじさんのチンポおっきすぎ！  
顎が外れるかと思ったわよ」



『エロい着け方でしょ！』

『ううざって着けるとみんな』

喜んでくれるの。』

『おじさんも興奮した？』



♀

『ああ、あんな着け方されて』

興奮しない男はいないよー！』

『だよね〜』

満更むいへい寝顔になんね。



「時間ももったいないし……スライッ…」

小さな身体で飛び掛るおちんちん  
ズミズミに押し倒すぞ。

ゴ  
ッ  
ッ

「おじさんのキンポガチガチね…」

伸ばした手で。キンスの硬さを

確かめるおちんちんキョムミと握り込んで扱へ。







挑発するような笑みを浮かべながら  
言葉で責めはじめる。  
身体を密着させて押し付けられる  
小さな胸の感触が気持ちよくなる  
キスがわらわら大きくなる  
硬くなる。

「こんな小さな女の子に

一方的に責められて喜んでしまうなんて...

おじいさんのくっ・ん・た・ん」

ニ  
×  
ッ

ん  
ん  
ん

っ

っ

っ



ミッフィー

「んっ、はぁー！」

限界まで我慢していらおうと思ったが

耳元でそんな囁きをされた事で

我慢できず射精してしまっ。

イクイク

イクイク

「あはっーすっぴんー！」

チンポがゴクンゴクン

暴れまわってる。





あらかた精液を吐き出した後、  
ビクビクと跳ねながら  
次第に射精が収まる。

『それについても、いっぱい射精したわね〜』

精液の詰まったロビーズを見ながら  
嬉しそうに満面の笑顔で喜ぶわね。



『今度お風呂に入るときは必ずこれを使う』



使用済みロシアンブルーを綺麗に洗うのに最適な洗剤です。  
手際よく洗うのに最適な洗剤です。

ゴキブリ

ゴキブリ



そつう言って身体を滑り込ませ

ペニスを抱きしめるようにして

胸を寄せて包み込む。

「おじさん、せっき胸を押し付けた時

凄く嬉しいような顔してたよね」

きゅん

「おおー」

「ペニスが越えても、

ふいにいじりながら感じるかな

胸の感触が伝わっている。



『今…おっぱい…ちいせえっと思っただけじゃ…！』  
ちよっさの不機嫌な顔を向けてくる。

『あっ…ごさ…わさ』

ぽんぽん

ムム

大きさに不満があるわけではないが

凶星されて返答に困る。

『そんな小さなおっぱいに興奮しているんですけど…』  
抱き寄せた胸と腕でペニスを擦りあげる。



『あはっ！ちょっと動いただけで  
そんなに興奮しちしゃったの？  
先っぽからカウパー垂れ流しじゃない』  
どちらかと言つと肉体的な刺激よりも  
視覚的な刺激の方が強い。

ポロッ

小さな胸を精一杯すり寄せて  
パイズリする姿は  
興奮するなという方が無理だ。  
『いひっ！口も使っであげる』



刺激に弱いカリ首や裏筋を

ほじるように舐め回すので

気を抜いてしまうとすぐに

射精してしまうことになる。

「いくらまで堪えられるかな？」

びゅる

ジュン



いやいやと挑発的な笑みを向けられるが

そんな刺激に長時間耐える事が

出来るはずもなく射精してしまう。

「うおおっ」

「キャッー」



「……っ」

目の前で噴水のようになり、  
勢い良く射精される。

ロブドームがなければ

顔中が精液塗れになってしまう。

思われる量の精液が吐き出されてしまう。



ジュキ

ジュキ

ジュキ

ジュキ



『こんなに射精なんて

そんなに気持ちよかったの？

私のパ・イ・ズ・リー！』

\*\*\*

嬉しいような笑顔を見ていてまじっ

ちっぽいぞいぞい

野暮なミミロクを吐き出して。うん





手早く新しいコンドームを挿入して替えて

新しい刺激を与えてあげる。

「おじさん、やっぱりいいっぱい射精してるはず  
いったいどうやって溜め込んできたのよ」

ちゅぽちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

玉袋と竿を同時に

刺激しながら聞こえる。



「へっ、今日のたぬにちゅっやキヲ禁じてたんだ…」

「絶え間なく与えられる刺激に耐えながらうたね。」

「そんなに楽しんでるの？」

ちゅっ



「キスを的確に攻めたいの。まじでっ」





「うおっ！」

玉と竿の同時刺激に耐えられず

あっけなく射精してしまっ。

しかも射精が止まるまで竿を扱く手が

止められぬじやはない。

ちぽんぽん

びしょるっ

ジュウッ

「うんうん、まだまだ

いっぱい溜め込んでさっね」

嬉しそうに口袋に吸い付く。



「ちょっと待ってね、新しいロムを…」



背を向けて新しいロムを

取りかき回して

お尻がくっついて

「ウ」

向けられたお尻に目が奪われ、

ふらふらを吸い込まれるように

手が伸びる。

「おじさん?」



いきなりお尻を掴まれて驚きの声を上げる。

「うん。可愛いお尻が

誘惑するお尻に揺れてたから...」

「...もう、じょうがないわね」

ニ

ニ





新しいロマンブリームを装着して壁に身体を寄りかかる。

「今度はお尻の方でオキンプポ扱いしてみるっ！」

「おおっ！これはこれでー！」

言われるがまま尻山に

ペニスを宛がい両脇から

尻肉を寄せてペニスを

挟み込み腰を振る。

「あはっ、

おじさんすっぴんへ

気持ちよさそうー！」

せっきのパイズリよりも

ペニスを包み込む肉の量が多いので

柔らかかな感触を楽しむ事が出来る。

きゅん

ズ

ズ

ズ



『うっっ！もうっ……射精るっ！』

先ほどもまでのピニスを扱っただけの行為ではなく、腰を振ってこの刺激なので限界が近い。

んっ

ぎゅっ

尻肉をがっちりと掴み、ペニスを扱く様に最後の二突きをする。ビクンと身体が震え、大量の精液が吐き出される。





「まだ、いっぱい射精したわね。」

××××

ジュッ

大量の精液の詰まった  
ロビエームを見ていると嬉しくなる。は、精液を。

ジュッ





尻こきした時に腰でイッた事により  
射精による満足感と脱力感がすごい。  
そのままの姿勢で

ベシッという音を立てていっまわ。

「おじさんもう疲れちゃったの？」

少し挑発的な視線を向けている。





「...あ、ちよっぴに持ちあそばせ...」

「ああ、オナニーばかりして

腰を振ってイクのになれてないや

そうなのっちやうよねっ」

後背位の体勢とこういうもあつて

ある部分に興味が湧いてくる。









「ああ、物凄く興味があるー！」

筆下ろしもまだなのには

アナル童貞を先に卒業する「じゃい」

なっつてしまっがじゃうがなご。

「まあ、おじさんがそっままで

ったごっつ言っならごごごごめ

んんん

お許しなさいのびるわさみり  
新のミスパンクアーツをひびく。



ロイヤルブルーを着まわのクニスに  
ローションをたっぷり塗りつけてお  
尻穴にクニスを宛がう。  
「ぐちゃ、ぐちゃ」

おニ

おニ

押し返りながらくニスを  
ぐちゃぐちゃ挿くうひすっ。



「おお……！ローが女の子宮の中に  
挿入する感覚が！き、気持ちよすぎ……！」  
尻穴の中は柔らかく気持ちいいが  
締め付けがきつい。  
「んっ！」

くちゅっ

ゴッ

彼女も感じているのが  
小さな身体が小刻みに震えている。



「はあぁ...」

ようやく最奥までペニスを  
挿入することが出来たが

はっきり言って身動きが取れない。

少くとも動いたならもういいわ  
射精してしまえばいいのだ。





『おじさん大丈夫？』

挿入されているからか

顔が火照って艶かしい表情で

心配してんねる。

『あ、あ。だ、大丈夫…』

まったく大丈夫じゃないが情けない姿を

見せないように意を決して腰を振る。





「くはっー!」

「ああんっー!」

「二度、三度腰を振っただけで

あっけなく射精してしまいました。

精液を搾り取るように尻穴の中が

ペニスを扱くように蠢く。

「ふっふっ  
しー」

「びゅん  
びゅん」

「びゅん  
びゅん」

「びゅん  
びゅん」

「はっ」

「はっ」

「一度の射精では収まらず

二度、三度と繰り返される。

あまりの刺激に呼吸が乱れる。



「やっぱり刺激が強すぎたみたいね…」

おじさん童貞だし、しょうがないわよ。

エッチに慣れてる人でも

同じような反応だから」

ぬぽんっ

どろっ

♡  
んふっ  
んふっ

早漏過ぎた事について

レキローさんへおめでとう。



『ほら、落ち込まないで。』

おじさんはまだセックスに

慣れてないんだから。

腰を振る練習をしよう！』

ピッピッ

首に手を回し誘うように

ベットに横たわり正常位の体勢になる。

素股で腰を振る練習をしようという事だ。







『こんなところでオチンポ入れて  
扱きたいとかおじさん上級者すぎ♪』

水抜き部分に挿入し水着の生地と  
お腹の柔らかかな肉の感触を楽しむ。

グイッ





『そんなに鼻息荒くして、腰を一生懸命振っているのが  
ちょーきもいんどすけよっ』

罵倒される言葉とは裏腹に

その表情には嫌悪ではなく愉悦が浮かんでいる。

「〜っ」

そんな罵倒を受けても屈辱よりも興奮を感じてしまう。

言葉責めも慣れていようで相手にどんな言葉を掛ければ  
性的興奮を引き出せるか熟知しているみたいだ。

「ほら、射精しちゃえっ、射精しちゃえっ」

ズッ

ズッ





腰を激しく振るよ

一気に射精感が湧き上がっている。

ゴクン

ぐわん

「うおおおおー！」

身体をゴクンと大きく揺らせ、叫ぶと同時に射精する。

「んっー！」



「はぁ…はぁ…」

思った以上の射精による快感に  
肩で息をする。



ジュン

ジュン

「あはっ、そんなに気持ちよかったんだ！」

下腹部に当たる「ベスト」の中の

精液の量と温かさから

この行為の満足度を感じ取ったらしい。



新しいロマンティックをいかに  
再び水抜き素股をいかに  
体勢を変える。

きゅん

×××

「そんなに気に入ったんだらな」





水抜き部分に挿入すると

脚を抱え込んで思いっきり腰を振る。

ズ  
ズ

ズ  
ズ

ズ  
ズ

『旧型スクール水着を着てもらったら、』

『誰も一度はやってみたいと思ってる』

×××

『え、こんな変態的な事したいって』

『言ったのおじさんが初めてよ』

『呆れながら懐疑的な視線を向けている。』



「じゃあ、その人たちは

旧スクの魅力を

理解してなかったんだよ。

こんなに興奮するプレイを

しないなんて…

勿体…無い…うっ…!」

「ゴクゴク」



「んっ!」

旧スクの魅力を語りながら射精する。



「まあ、おじさんが喜んでくれたのなら別にいいじゃない。」

フイ

フイ

水抜き部分から引き抜かれた  
コペンゲームを見て微笑む。





『おじさんはちょっと早漏すぎだから  
』**コシで我慢訓練するわよ**』

**持ち出さてきたのは**

**いわゆるオナホールだ。**

**童貞の自分は実物のオ○ン○ロ○の**

**感触を経験した事がないが**

**オナホールは実物のオ○ン○ロ○より**

**気持ちいいという評価も聞いた事がある。**





「こんなおもちゃも我慢できないんじやー」

私の瞳に入れただけで筆下ろし終わったっちゃうわよ」

確かにわっぴきのマナにセックスは

ほんとんど動く事もできずに終わったってこまった。



「マナ」

「それじゃ、始めるわね」

ローションを溢れるほどたっぷり注入された

オナホーランド。ピリスが挿入されたのよ。







根本まで挿入されたオナホールに  
ペニス全体を包まれる。

貫通型といついてもあり

亀頭の先がオナホールを貫通している。



「それじゃあオナホール扱っけど」

私がいいって言うまで

射精しちゃダメよー!」







「そ、そんな...んっー!」

いきなりになるのを必死に堪える。

だんだんとオナホールで扱く速さが増っしんす。

「ほらほら、おじさん

がんばれ♡がんばれ♡」



「んっー!」

「必死に我慢しているおじさんの顔、

私は好きよ!」

嬉しげになんか喜びを浮かべてる。







「うわあ…」

これまたたくさん射精したわね…。

そんなにオナホが気持ちよかったなら

オ○ンコは必要ないかしら？」

「そ、そんなー！」

あれだけ我慢したのにそれはあんまりだ。

「あはっ、『冗談よ。』

約束ごおりちゃんとお○ンコで

筆下ろしさせてあげるー！」





『それじゃ、おじちゃんの手でお願い』

『始めましてようかー！』

新しくロイヤルオーダーメイドの衣装を着て

仰向けに寝た状態で身体の上に乗る。

『なんでもこの体勢なの？』

普通、慣れないうちはなかなか

スタンダードな正位位になるのが

定番な気がした。



「んっ、おっぱいさかぬ...まじっかー...  
ズムンぱんちお尻のたぶさ...」  
んっんっち回珠のわんじ珠ん。

「ん、おっぱい...」  
おっぱいおんち。  
おっぱいおんちおんちおんちおんちおんち  
おんちおんちおんちおんちおんち。





「おじさん、ちょっと罵っただけで  
こんな風にオチンポ硬くしてたの  
知ってるんだよ」

。ニスを割れ目に押し込んで擦らねんこ。。

んえ。

おニ  
おニ











『そういえば何でこの体位でかって話だったわね。  
こんな身体の小さな女の子犯されて  
童貞喪失なんてシチュエーション  
おじさん好きでござる。』



「ギン  
ギン」

「その言葉を反響する。キンスが硬さを増す。ニム。』  
『ほんとオチンポは正直ね。』



「それじゃおじさんの童貞いただきまーす！」

ペニスを割れ目に宛がいゅっ♡♡♡と腰を洗ぬしこっ。

あ、♡

あふふふ

あふふ

「おおおお！」

壁はずいじょう濡れしこたつん

いっぺんこぼぺニスを飲み込み

柔らかかな肉壁を押し広げて挿くわすしこっ。♡



「んっ！はぁ…」

熱のこもった吐息を洩しながら  
挿入されたピニスを感じてくるみたいだ。

抵抗が強くなりピニスを締め付けない。  
途中から押し返すようになってくる。

ぬるっ

ぬるっ





ペニスの先端がロマンを

何かに当たる感触を受ける。

「んっ…はあぁ…、奥までみっちり

おじさんのクンポ啜え込んだじゃった！」

は、

は、

はっ

はっ

小さな身体であれだけ大きなモノを

なんなく受け入れている事に驚く。

膣内は柔らかな肉壁で締め付けてくる。

オナホールと違い温もりを

感じるので快感が増幅する。



「どう、おじさん。童貞を卒業した感想は？」

高揚した表情で問いかけてくる。

「ああ、凄い…熱い…ぐにぐに暖かいです」

膣内が吸い付いてくる感じが

絡みついてきて気持ちいい…」

ロロ



「良かった！」

でも挿入しただけで終わりにじゃないわよ？

これからもっと気持ちよくしてあげよう。ゴ・る・る・る

おじさんは動いちゃダメよ、

私がおじさんを犯してるんだからー」

お尻を振りはじめた。

ゴロ

ゴロ











ビクンと身体を震わせた事で  
絶頂に達した事を理解したように  
膣内が精液を搾り取るうごと蠢く。

はぁ

はぁ

ぬん

引き抜かれた。ピニスがズルズルと勢い良く飛び出す。

んっ…ふああ…、もうイっちゃたの？

せっかく私も感じてきたよーなのよー！

ちょっと不満そうな表情を向けられる。



「まあ、これでおじさんの筆下ろしは

無事終わったわね！童貞卒業おめでとう！」

おは、



エロ

エロ

ペンデュラムに射精された

精液を見て満足ぶつに微笑む。



ペニスに装着されていたロンドンドームを外し  
おもむろに中の精液を飲み始めた。



「んっ、おじさんの童貞卒業記念精液…」



「おぉー!」

女の子がわびわびロレンドーをくらっ

自分の精液を飲む姿に興奮してしまっ。



「んっ?」

ククククと喉を鳴らして飲み込んでっ

光景に興味深く見ていた事に気がついたらしい。



「んっーっ、あんなに射精した後なのに

スリッパで濃厚」



ロっ

「うちの反応を楽しむように中身を飲み干すくらいに満ちた感じがする。



『こんな風に飲んであげると』

みんな嬉しそうに喜んでくれるんだよね。

まあ、私も飲むの好きだし♪』



期待通りのいちごの尻尾を

いつか味わおう。



『そ・れ・が・ら・』

スベツェルミローヌの条件クイマー

おぢいちゃんー！



乱れていた呼吸を整えよう

ぱちぱちと拍手される。

『…やいっ事は』

『そう、これからのはプロな生セックス

中だじし放題！』

『おおー！』



十分堪能していただいておりますのっかり忘れていたが  
これがこのローズの醍醐味だった。



「時間はまだ結構残ってるけど…」

「おじさん大丈夫?」

「ちよっぴい配をいつかいつかを伺いいたる。

まあ、あれだけ射精しまくっていただのだから

体力的にも精神的にも限界でもおかしくない。

「さ、おつんわっおまじもこ

をの尻おつんわっ」

つたう、クニスは寝てるよじんが

硬く反り返って、自分で主張してた。



「それじゃあ、これから裸でお願ひしようかなー！  
すく水姿を十分堪能したいので」

今度は生まれたままの姿を堪能させて頂きたい！



「えっ？私がかまわないけど…」

「いっの？」

「うちの提案に意外そうな表情を浮かべる。

「えっど…なにがまずいのかな？」

「別にいいんだけど、人によっては「スフ」し衣装を

脱いだりすると駄目だしされたりするから…」

「おじさんがいいなら問題ないわよ」

「ああ、なるほど。確かに人によっては

「スフ」の意味がなくなる！とか拘りがありそうだ。



「これでいいかな?」

照れ隠しなのがちよっぴと恥ずかしくもないポーズをやる。



「おおっ!」

真っ白な肌と日焼け跡の「タンブラー」の「タンブラー」が素晴らしい。

「最高に綺麗だよ!」

「おじいちゃんそれは褒めすぎだよ」

「さっさと帰るわ。さっさと帰るわ。さっさと帰るわ。」







「お待ちかねの生のオ●ン●ロセックスよ。  
生セックスの童貞は

おじさんが自分で動いてお卒業してねっ」



挿入がずいぶん気持ちいい

脚を広げてお尻をくねくねしてる。

すでに愛液で溢れる蜜壺に

ゆっゆーと押し込んで挿入感を楽しむ。



「んっ！あっ…はあっ！生キンポきたー！」

はっきりに言っつ先ほどのロマンティック越えの  
感覚とは比べ物にならない。

膣内のヒダヒダが直接ペニスに絡み付いている。

ぷんぷん

そいつでなんと言っつてもこの膣内の熱いだ。

小さい子は体温が高いからなのか

お互いの熱をもった性器同士が

触れ合う事で快感が増している。

ロマンティック一枚の隔たりでこんなにも違っつは…。



『あんっーおじさん早く動いよ。』

『こんなオチンポ入れられただけで終わりとかが生殺しよー!』

あ〜

『あ、うめん。ちよっぴ感動に浸っていた』  
ゆっぴらっぴ引き抜き、また奥まで挿入。  
だんだんちよっぴベースを上げんこらっ。



「あんっ…はっ…」

もっと遠慮なくガンガン突っ込んで。

「ちゃんと受け止めてあげられるかな」

しゅっ  
ぽんっ

しゅっ  
ぽんっ

はっ言わせたかこいっ

もっ腰の動きは止まらなかつた。



ただひたすらにピストン!

ピストンを扱くようにして激しく腰を振る。

射精を促すように

膣内が吸い付いてくるので限界が近い。



「もう限界…で…で…」

「あっ、んっ…」

「いいよ…一発で妊娠しちゃいたいぞうな」

「おじさんの濃厚な精子…私の子宮に精液ぶちまけて♡」







「はあっ…はあ…」

射精が止まるまで

突き上げ続けたので呼吸が荒い。

「んっ…はあ…おじさん…」

生セックス童貞…卒業おめでとうっ」

熱い吐息を洩らしながら祝っひんする。

「んっ」

「んっ」

ぬおんっ

はあ

はあ



『ずっと今まで童貞だったおじさん千々波に』

『♡♡♡イカされちゃった♡♡♡』

『♡♡♡恥ずかしくないです♡♡♡』

『はあっ…んっ。ありがとう。』  
『最高の筆下ろしだったお…』  
『♡♡♡』  
『嬉うれい笑顔を向けてくれる。』





「あぁ...」

ゴックン

ゴックン

ゴックン

ゴックン

ペニスを引き抜くせう  
膈内の精液がかき出される。





「はぁぁ…」

流れ出る大量の精液をうっせーとせーと眺めている。

ゾクゾク

ゾクゾク

ゴロ

ゴロ

「もう…おじさんってば射精しすぎよ。

こんなに射精されたら

本当に妊娠しちゃうんじゃないかしら」



「ん、むんちるん...まだ時間あるんじや...  
時間までへメまくるん...」



「ん」

「ん」

「...んちるん...」





『それじゃ時間いっぱいまで楽しんでませうよー  
今度は私の事もちゃんといかせてよねー!』

お  
ま  
め

おれながらは生の感触をいじりてん楽しんでた。





「や、や、ちねも口ひくひくしてるかな〜」

「まずはフエラからなのね。んっ…」

亀頭むき出しの状態で温かな口内に唾え込まれる。

最初の時の様な皮むきのためではなく、

快感を与えるための本格的な奉仕。

じゅぽっ、

じゅぽっ、

「うおおー！これは…たまらな〜」

大量の唾液を絡ませてじゅぽっじゅぽっや卑猥な音を立てていっしょに尽くす。

舌を絡め、すぼめられた頬や喉の奥を使って竿全体を扱く。



そんな激しい行為に耐えられるはずもなく  
あっけなく射精してしまっ。



「くはあぁー!」  
射精中も搾り取られるように  
口内で扱かれる。



射精が終わったことを確認すると  
ペニスから口を離し口内の精液を  
ロクロクと飲み干している。

『ぷはあ〜！おじさんは精液の量が多すぎるから  
一度に全部は飲みきれないわね』



ぷはあ

びん

ちゅっ  
ぽん

お掃除フェラとさっさつださう  
ペニスに残っていた精液も舐めとり、  
尿道に残っている分も綺麗に吸い取られてしまった。



献身的なお掃除フェラを堪能しているよ  
そのままペニスを抱きかかえて  
小さな胸の谷間に包まれる。

『今度は生おっぱいでいいよあげるよ』  
小さな胸を一生懸命寄せて作った谷間の  
フニフニとした感触が気持ちいい。

ポロっ

『くっ...これは視覚的にもやばい...』

水着の時は見えなかった可愛い乳首が擦れる。  
滑りを良くするために谷間に唾液を垂らし  
身体全体を動かしてペニスを扱く姿に興奮して  
急速に射精感が高まってくる。



「ぐめんー！うおおー！」

「きゃっー！」

いきなりの射精に可愛い悲鳴をあげる。

こんな奉仕に耐えられるはずもなく

欲望のままに射精する。

ぐんぐん

ジュン



今回は遮るものが何もないので  
勢い良く射精された精液は身体中を汚くしてさっ。<\/p></div>



『もう、おじさんってばいきなり射精ないですよ！』

口で受け止めようと思ったのに…

『そんなに私の生パイズリが気持ちよかったのよ！』

身体中を精液塗れにされた事は

それほどこいごころなごらごらです。



『あ、気持ちよすぎで我慢なんごできまなかったよ…！』

『まったく、しょうがないわね！』

胸の大きさを気にごころみだいだったって

パイズリでイかせた事で上機嫌なのだらう。



「んっ…はぁ…」

おじさんのチンポ奥まで…届いている…」

何度も射精したくせいで耐性がついてこきたので

自分よりもリンちゃんを感じさせるために動く。

「はっ  
ちゅ」

「はっ  
ちゅ」

「はぁ…んぁ…そっ…いい…いい、もっせ激しー」

細い腰をがっちり握らんと激しく腰を振る。

「ぶっ…こんな感じっ」











『むふっ、それは楽しみねっ』

振り返った瞳には快楽を貪欲に求める期待に満ちた輝きが宿っていた。

つらに熱のこもった吐息や上気した頬、

さっきの絶頂でスイッチが入ってしまっただらいい。

ニロズニ

ジュッ

ジュッ

んふっ





「んっ、ふあああー！」

体位を変えて挿入する。

体勢を変えるだけで

膣内の違う部分がいすれ合うので

先ほどとは違う刺激を感じる。

すっ

ちゅっす

ちゅっす





「はああ…この…体位もいいかも」

いつもと違った刺激が…んっ！」

膣内に残った精液と愛液が潤滑油と

なあってキツイ締め付けでも

難なく「ストン」どきるので

自然と腰の動きが速くなっぴんぐまぐまぐ。

じゅわん  
ぽんぽん

じゅわん  
ぽんぽん

「んあっ！いいよ、おじさん！」

ふあああ…、激しくかわれるのって大好き、」



「ぬおおおー！」

「ぐぐぐ」

「ぐぐぐ」

「ぐぐぐ」



んふしっ

「あんっ、ふあああー♡」





「はあ…はあ…あったかい」

おじさんの精液が身体に

染み込んでいるみたい！」

小さな膣内に収まりきらない

溢れ出る精液を

熱を帯びた表情で眺めている。

「あ」

「ロニ」

「残り時間も少ないし、次が最後になりそうね」



『あは、最後はやっぱり正常位なのね』

小さな身体を押し倒して覆いかぶさる。  
割れ目をなぞるように。ピニスを押付け  
一気に挿入する。





最後の性交と聞いていざもあ  
がむしゃらに激しく腰を振る。

『あんっ、がむしゃら種付けピストンキタマッ！』

びゅんっ  
しゅぽっ  
しゅぽっ

小さな身体を抱きかかえ

押しつぶしてしまわないかと

思うくらい腰を打ちつけ最後まで挿入し

ありったけの精液を射精する。

『うおおおー！(孕め！孕め！孕めっー)』



うちらへお互いに息を荒げて話す事もできない。

『…んっ、おじさん！さっきのちょー良かった！』

気持ちよすぎで一瞬意識飛んじゃった♪

あんなに射精されたら

本当に孕んじゃったかも…なんてね♪』

「ジュン」

「ジュン」

すべての精液を吐き出したと思っ

引き抜いていたペニスが

そんなセリフに反応してしまっ

射精された精液が小さな身体を汚してしまっ



『ぎゃっ！あんなに…射精したのに』

最後に…ぶっかけとかおじさん…絶倫すぎよ……

んっ…あったかい♡

はあっ…はあ…あっ…時間きちちゃったね…』



「ニロニ」

身体中を精液まみれして

オ○ン○からも精液を溢れだしてんる。

『はあ、はあ…。そっ…。そっただね…』

もう体力も精液も空っぽだ。



『もう、こんなに射精するなんて』

『私のちっちゃなオ○ン○ロ○じ○ゃ○受け止めきれないわよー!』

×××

「びしょ」

「びしょ」

瞳内から溢れ出る大量の精液を嬉しそうに眺める。



「んっー！」

今回は私も結構楽しめたわ！」



あれだけハメまっしで

精も根も尽きたこっちらと違い

まだまだ余裕がありそうだ。



「だから特別サービスで

童貞卒業記念に記念撮影をさせてあげる」

ポーン

オニキ



精液まみれでダブルピース姿を  
スマホで撮影する。







「いっっー！後でトロッを見ながら思っっっっ  
オナネタにっっっっんムンムンっっっっなっっっ」







『やっぱり知ってたんだ。』

そう、そのニースなんだけびびりうかな？

おじさんならニース相手でも問題ないでしょう。」

ニース相手のプレイを想像して

また大きくなっていった。ニースを見つめられる。

ズビュン

プロ。



『もう出来るのならこっちは大歓迎だよー』

リンちゃん最高だった。がニースの事も気になる。いた。



「やった♪次が楽しみー!」

すでに次のプレイを想像しているのだ  
嬉々たるイキミイキミの音。



いっ!

×××



「これからも楽しい時間が続きますよ。」